

# こみこみ

日立市のコミュニティ情報紙

発行：日立市コミュニティ推進協議会  
 編集：コミュニティ情報紙編集委員会  
 〒317-8601 日立市助川町 1-1-1  
 日立市役所市民活動課内 Tel 22-3111  
 Fax 21-7000

No. 3

2000.4.1



(上) 小学生に鮎の説明をする助川さん(左端)  
 (下) 諏訪梅林での鮎の稚魚の放流

## 目次

### 単会リレー訪問

- 仲町学区内を住みよくする会 .....2
- 水木学区市民運動推進会 .....3

### ザ・特集

- .....4
- 実ったパートナーシップ！住民参加の公園づくり  
 ～（仮称）水木水公園の場合～

### 「私のリーダー論」

- .....6
- 東京 中野区 「野方の福祉を考える会」  
 事務局長 北川 侑子さん

### グループ情報

- 人形劇団パッペ .....7
- わがまちの匠たち .....8
- 日立のよいところ .....8

鮎の泳ぐきれいな川を目指し、「鮎川をきれいにする会」や近隣の小学校などが稚魚の放流を行っています。

以前は水産試験場から稚魚を分けてもらっていたのですが、輸送などで弱ってしまうので、鮎川をきれいにする会の相談役・助川泰一さんが一念発起。12年前

から手作りのふ化場で稚魚を育てて提供しています。

放流する稚魚は体長5cm程ぐらいのもので、約80cmに成長して戻ってきます。

3年後、成長した鮎の目に映る鮎川の環境はどのようなものになっているのでしょうか…。

# 主役は子どもたち

## 仲町学区内を住みよくする会

### 会の構成

仲町学区は日立山方線を背骨に西は本山トンネル、東は6号国道に至る東西に長い学区です。昭和56年の日立鉾山の閉山の影響で高齢化が進んでいます。

仲町学区内を住みよくする会は、広報部、環境美化部、文化部、事故防止部、防災部、体育部、青少年育成部の7部で構成され、仲町コミュニティセンターを拠点に活動を行っています。

コミュニティ推進員（町内の代表の方）に各部のどこかに所属してもらい、地域住民のコミュニティ活動への参加を推進しています。

一つの専門部が独立して事業を実施するのではなく、一つのイベントについて各専門部が連携を取り合いながら取り組む傾向にあるのが特徴です。コミュニティセンターを拠点に様々な問題について各専門部の役員全員で解決方法を探すのが基本姿勢です。

最近、仲町学区内で実施されたコミュニティプランのアンケート調査の回収率は約83%。コミュニティ活

動への関心の高さが伺えます。

### 地域と学校と親子の融和

学校と地域と親子との連携を目指し、三者の結びつきが強いのが大きな特色です。

明秀学園ダンス部、日立風流物西町支部の子ども鳴物、平沢中学校吹奏楽部などが夏祭りを盛り上げます。

月に1回行われているひとり暮らしのお年寄りとの交流会では、思いやりのある子どもを育てることを目的に、地元の保育園・幼稚園・小学校の子どもたちとお年寄りとのふれあいの機会を設けています。

こどもまつりは、小学校5・6年生が企画・運営し、青少年育成部員が講師となって、親子と一緒に牛乳パックやペットボトルを利用したおもちゃを作って遊び、交流を深めています。

### 交通事故ゼロを目指して

専門部の中の「事故防止部」は他の学区にはない特色といえるでしょう。

日立中央ICの開設、グリーンタウン上合団地を抜ける道路の開通に



会長 鈴木 勝美  
・事務局 仲町コミュニティセンター  
TEL21-5564  
・世帯数 1,944  
・人口 5,117  
(平成11年6月1日現在)

より、日立山方線の通過車両は著しく増加しました。その影響で交通障害がところどころで発生しています。

事故防止部では交通安全母の会との連携で通園通学路の点検巡視をしたり、食事会に集まるお年寄りに交通安全のPRをするなど意識の向上に努めています。



いちにのさん 飛んだ飛んだ 竹とんぼ

### 豊富な文化遺産を生かして

日鉾記念館、本山変電所、旧共楽館などの産業遺産、南極禅師の座禅石、徳川斉昭歌碑などの文化遺産、また、四季折々の自然の美しさが豊富に散見される地域です。

住民全員が自分たちのまちの実状を知ることを目指して毎年歩く会を実施し、これらの場所を訪ねています。

### 将来の展望

コミュニティプランのための取り組みのなかで、アンケートの自由記述の意見を拾うように努め、会の活動の足元を固めようとしています。

そして、特に若い世代の方も気軽にコミュニティ活動に参加できるような雰囲気作りを目指してこれからも取り組んでいきます。

「いろいろな活動を通して多くの人たちと交流を持ち、知り合い、困った時には窓口になり心のよりどころとなるのがコミュニティだと思います。」と副会長の阿部さんは話されました。



おばあちゃん見てて上手でしょう

# 住んでよかったと実感できるまちづくり 水木学区市民運動推進会



会長 丹 満夫  
 ・事務局 泉が森公民館内  
 TEL52-3225  
 ・世帯数 3,662  
 ・人口 10,397  
 (平成11年6月1日現在)



早く早く…優勝するぞ

福祉部では見守り仲間づくりの充実、各種団体との連携強化、広報活動の充実、地域性を生かした水木学区らしい事業の展開などを目標に取り組んでいます。福祉施設の研修などによる地域の方々への啓発活動にも積極的です。

## 泉川に堰<sup>せき</sup>

過去に水不足により火災の延焼を食い止められなかった苦い教訓を基に、防災の総点検を行い、泉川の水利用の研究を積極的に進め、同時に市当局への働きかけも行いながら、板を用いた堰を2箇所を設定しました。防災訓練では水利用を実践に生かすようにと、放水訓練が実施されました。



泉川の堰

## 会の構成について

水木学区は「海と泉と森のみずき」と言われるほどに、風光明媚な環境の中で、昭和46年、市民運動実践協議会として発足し、平成元年に水木学区市民運動推進会と呼称改正されました。

活動の継続で輪を広げることを目標に、「ふれあい」「助けあい」「語りあい」「認めあい」を合言葉に、「住んでよかったと実感できるまちづくり」を目指して各種事業を進めています。

会の組織は青少年育成・レクリエーション・文化・自主防災・美化緑化環境・福祉・広報・総務の8専門部で構成され、推進員全員が専門部に所属します。

## 子どもたちと楽しいときを

水木海岸で子どもたちの集まる事業をと始めた「みんな集まれ」は青少年育成部が担当。10回目になりました。現在は会場を水木小学校に移し、PTAや子ども会にも協力を要請しています。

今年度も夏休みに入ってすぐの7

月31日に実施。各団体からの模擬店の探索や各種ゲームなどで熱気ムンムンの盛況でした。また、地区社協誕生をきっかけに高齢者疑似体験も行いました。

## 文化の継承・精霊流し

お盆の15日に昔から続く精霊送り。以前はお供え物を海に流していましたが、環境汚染の問題から浜辺に祭壇を作り回収するようになりました。

## 三世代レクで地域交流

ふれあいレクリエーション大会は7ブロック対抗で行われ、昨年は約1600人の参加がありました。

多くの参加者があるのは、毎年実施しているため各地区住民の協力が得やすいこと、誰もが楽しくできる種目を取り入れていることなどがあげられます。

## 福祉への取り組み

11年度から全コミュニティで創設された地区社協。水木学区では市民運動推進会の福祉部がその事業を行っています。

## 会のこれから

やる気のある推進員には1年だけではなく会に残留していただくなどして、より一層の会の充実を計り、イベント型から日常型へのコミュニティ活動の転換を図っています。

現在、策定作業に入っているコミュニティプランは、地域住民の根幹にかかわる諸問題、将来像などを抽出し、住んでよかったと実感できるまちを目指して活動の輪を広げていきたいとのことです。

自然環境の保全是、各コミュニティの大きな課題になっていますが、住民には願いやアイデアがあっても、手間も金もかかるし、どう取り組んだら良いものかと尻込みしてしまうことが多いのです。しかし、住民と行政が互いに熱意を持って取り組み、成果を上げている事例が日立市にもいくつかあります。自然を生かした公園作りに、住民と行政が共同で取り組む「(仮称)水木水公園」の場合を、コミュニティ活動の視点から取材してみました。

### 貴重な魚を守りたい

こんな近くに豊かな水と自然環境があった

泉神社境内の一角にある泉が森湧水。境内から湧きだした清水は、隣接する旧泉が森養魚場の池を流れて泉川へと注ぎ込みます。この養魚場跡地で全国的にも貴重な淡水魚・イトヨの存在が確認されたのは、平成5年のことでした。

「このまま見過ごしたら、イトヨは絶滅してしまう」子どものころからイトヨと接し、大変珍しい魚であることを知っていた、地元の生物教師を始めとするイトヨの保護を訴える声がかきかけとなりました。水木学区市民運動推進会を中心とした地元住民の、イトヨの保護を求める運動が始まりました。

平成5年9月。水木学区市民運動推進会から日立市議会へ、泉が森養魚場跡地をイトヨの保全を中心とした親水公園として整備するよう請願書が提出されました。これが採択さ

れ、市では泉が森養魚場跡地公園化の計画を正式に決定し、用地交渉等の調整に入りました。



現場に出て打ち合わせ

### 住民が動き、市が動く

行政とともに、地域の声が聞こえる組織づくり

自然環境は昔からそこに暮らす人々の生活とともに成り立っています。平成9年、水木地区の8町内の氏子、氏子総代、水木学区市民運動推進会の専門部長の方々に呼びかけ、公園づくりについての地元の理解と協力を得ることを目的として「(仮称)水木水公園」建設委員会が結成され、地域のすばらしい自然の魅力と存在価値について地域住民にアピールを続けました。

平成10年度に入り、泉が森養魚場跡地の基本計画立案の事業がスタートしました。基本計画を策定するにあたり、建設委員会と市で、養魚場跡地に生息している生物や野生生物の保護に、公園が出来た後も行政と地域住民が協力してあたること、住民の要望を反映させた公園にすること、そのために住民参加のワークショップ方式で公園の計画づくりを進めることなどで合意しました。

早速、市と水木学区市民運動推進

会は、地域の内外に呼びかけ、泉が森やイトヨについての勉強会などを開きながら、基本計画づくりにあたるワークショップへの参加者を募りました。同年10月、14名からなるワーキンググループを立ち上げました。その後グループには、泉神社の宮司さんや学校の先生、専門の知識をもつ方、老後の生き甲斐を求めた方など様々な人々が参加することになりました。



会議でアイデアが浮かびます

## アイデアが いっぱい

(仮称)水木水公園実施計画案略図



### 学びながら住民の手で公園設計

主役は市民、広がる人の輪、地域の和

ワーキンググループは、公園の基本計画づくりに入りました。11年3月までに、ワークショップを8回、先進事例の視察や公園づくりのノウハウの勉強会などもまじえ、公園の基本計画案をまとめました。その間、メンバーは39名に増えました。泉が森という地域資源もさることながら、地域の豊富な人材を発掘できたことが大きな収穫となりました。

ワーキンググループは、泉が森公民館でイトヨの飼育を始め、地元の水木小学校の児童にも飼育体験を広げたい、公園予定地にゲンジボタルの幼虫の餌となるカワナも生息し

ていることを知ると、水公園をゲンジボタルも棲める環境にしたいと夢を広げています。

基本計画作成後には、公園の実施設計を作るため、班分けしたワークショップで8回の会合を持ち、具体的な形に描いていきました。グループの活動は、交流し、学び、夢を語る場となり、ワーキングの中で膨らんだ住民のアイデアや希望を、いっぱいに取り入れた公園の実施計画案が、昨年11月に練り上げられました。

住民参加による公園の計画づくりをスタートさせて2年。描いた夢は、次の2年後には現実の形となります。

### 活動は次のステップへ

現在、市は工事着工に向けて準備を順調に進めていますが、グループの皆さんは、まだまだ、これからが大切と言います。工事に植栽や、生物保護などで関わりたい。公園の活用、管理にも関わっていききたい。さらに泉が森湧水を中心とした生態系の保全に協力したいと張り切っています。

ワーキンググループでは、これらを実現するため、間もなく「水公園運営準備会」を発足させる予定です。市の担当者も、地域を愛し地域を良く知る住民が主導になって、行政が後押しをしていく公共事業の形を、今後も模索していきたいと話しています。

# 「私のリーダー論」



## 理念を共有することが大切

きたがわ ゆうこ 北川 侑子 東京都中野区・野方の福祉を考える会事務局長

「野方の福祉を考える会はみんなでオーケストラを演奏して楽しんでいるようだ」と30代の女性会員が言ったことがありました。確かに言えます。それぞれに役割があり、ハーモニーを大切に楽しくやってきたように思います。

ではリーダーは誰かと聞かれても困るのです。会長・副会長・事務局長など長の名のつく人はいます。けれどもその人たちが果たしてリーダーかといえばそうでもないのです。会の中心メンバーそれぞれが、時に応じてリーダー役を担っているからです。リーダーが誰だか分からないような会ですが、それは多分成り立ちに起因しているように思います。

東京都中野区は昭和40年代に「共につくる人間のまち中野」を基本理念とし、参加の区政を進めてきました。参加の区政を進めるひとつの方法として住区協議会をつくりました。住区協議会は、地域の問題を地域の人たちで話し合い解決を図ったり、あるいは関係機関につないでいく役割をもっています。

野方の福祉を考える会は、その住区協議会で、地域の福祉の課題について話し合うことから始めて、助け合いの組織をつくり発足するまでに6年もかかってしまいました。

それはひとりのリーダーが引っ張っていくのではなく、民主的な話し合いの場として、ひとりひとりの声

を大事にしながら合意形成を図っていったからだと思います。長い年月をかけた効果は、メンバー同士が何でも話し合えるようになったこと、共通の認識を持てるようになったことです。

こうして在宅サービスを切り口に活動を始めて11年になります。「夢は大きく、活動は足元から」を合言葉に、個別のサービスから取り組み始め、より多くの人と問題を共有するためにシンポジウムを開催したり、活動の記録を冊子としてまとめたりもしました。また、会食会・ミニデイケア・音楽リハビリなどと活動を広げていきました。

会のリーダーである中心メンバーは、決して仲良しの人たちが集まっているわけではありません。むしろ考え方も違いますし、個性もバラバラ、年齢差は40歳以上にまたがり、歩んできた人生経験もさまざま、専門的知識のある人やない人など、本当にバラエティに富んだ人たちの集まりです。

このような人たちの集まりですから、ものごとをきめる際の話し合いでは、さまざまな意見が交わされます。このプロセスを通して個人の考えや意見は変わり、会としての結論ができあがります。激論を交わすのは日常茶飯事ですが、不思議なことに

音楽リハビリの様子



気まずい雰囲気にはなりません。話し合うことが新たなエネルギー源になっているようです。

こうした構成メンバーの中でのリーダーの役割は、必要な情報を提供すること、出されたさまざまな意見を整理してメンバーに提示すること、困った時には理念に立ち戻って考えてみるくらいです。

さて、話は変わりますが、日本の社会は、長いこと個が集団の中に埋没していたように思います。ほとんどの人たちが、依存的環境にいたわけですから、でも介護保険では、自立を支援するのですから、どのように生きたいか、自分の意思を周りの人に伝えることがケアを受ける第一歩となります。つまり、これからは自分で考え、判断し、サービスを選択していく時代になります。

それは介護を受ける人たちだけではなく、ひとりひとりが自分で考え、判断し、行動していくようになっていくと思います。自分の考えをもった人たちが地域で活動するようになると、リーダーの役割は当然変わってきます。

私のリーダー像は「会の理念さえしっかり共有していれば、誰がリーダーになっても活動は継続される」と思っています。今後もより洗練された音色を奏でられるよう、少し汗も流しながら「住みよい地域づくり」という曲を楽しく演奏していきたいものです。

福祉活動を中心にさまざまな活動を展開



# 子どもといっしょに楽しいステージ

ひたち人形劇団 パッペ

## 会のおこり

長女の池の川幼稚園入園と同時に先生方と保護者が活動する人形劇サークル「ゆびっこ」に参加し、すっかり人形劇のとりこになったパッペの代表松本さん（高鈴町）、子どもたちの卒園後も活動を続けました。

1987年、婦人の家（現在のらぼーるひたち）で人形劇講座の講師を務め、講座終了後もメンバーの一部が残り、ゆびっこの仲間や友だちを誘い、パッペを結成しました。

「パッペ」は、動く人形をさす「パペット」と日立の方言「よかっぺ」から名付けました。

## 作品づくりから人形まですべて手作り

毎年4月から9月までの半年間は作品づくりに当てています。童話や民話をもとに自分たちに合った台本を書くことから始まり、人形を作り舞台装置や照明、音楽にいたるまで、すべてメンバーの手づくりです。諏訪の県営アパートの集会所を借り、週2回制作や練習を行っています。

10月から3月までは公演期間。幼稚園、保育園、幼児の子育て講座、地域の青少年育成部など、半年で約25回の公演をこなします。市外からの依頼にも出向きます。

公演は基本的には有料で、すべて



活動資金に当てていますが、年に4～5回、障害者施設やチェルノブイ

リ子どもたちとの交流など、ボランティア活動もしています。

## 会場と一体となったステージづくり



劇団のマスコットのパッペがほうきにまたがり風に乗って登場する所からステージが始まります。

「みなさん、こんにちは」「・・・」「あれ、返事がないね、もう一度、みなさ～ん、こんにちは」「こんにちは」「パッペです」

子どもたちの年齢やグループの性格によって、演目も話し方も違います。子どもたちの反応を確かめながらステージを進めます。

「みんなでいっしょにお話の扉を開ける呪文を言ってくれる?」「いい、パッペ、パッペ、パペット、パッペ、開け、開け、お話の扉」

パッペが子どもたちと話をしながら、徐々に子どもたちを引き付け集中させていき、そしてお話の始まり。

1ステージは約1時間。3つの話を演じます。話の間にはパッペが登場し、子どもたちとコミュニケーションを図ります。人形が子どもたちの前に出てきて、いっしょに歌いながら踊るものもあります。音楽はキーボードを持ちこみ、生演奏です。

最後にはメンバー全員が人形を持って会場に立ち、実際に人形に触れてもらいながらお別れをします。

## 夢は？

「子どもといっしょに共通の時間を過ごせるのが楽しいです」「子どもが集中してくれない公演はつらいですね」「でも会場と一体となり、コミュニケーションを楽しみながら公演するのが私たちのステージです」と団員の皆さんは声をそろえて話してくれます。

「夢、そうね、夢はやっぱり自分たちの専用劇場ですね。いつでも子どもたちが集まってこられるような場所があり、みんなで楽しみながらステージが作れたらいいですね。」

7月には自主公演を予定しています。ぜひ見に来てください。いっしょに楽しいステージを作りましょう。

● 自主公演予定 ●  
7月29日（土）  
シビックセンター  
多目的ホール  
★2公演行う予定です。詳しくはお問い合わせください。●

問い合わせ  
松本 TEL 22-3463

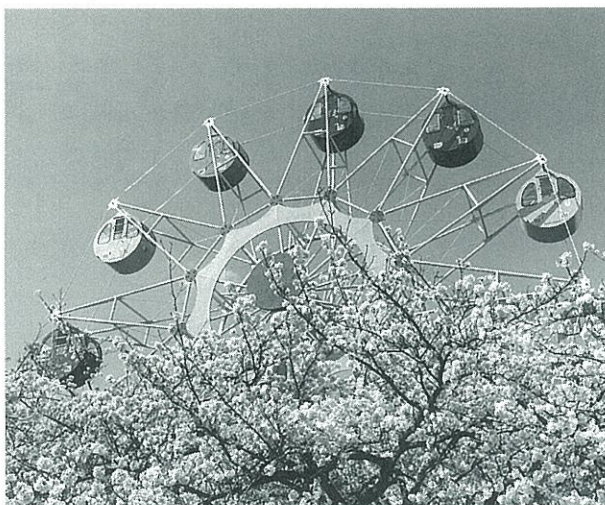
## かみね公園と桜

### 日立の よいところ

かみね公園で、春に多くの見物客の目を楽しませる桜並木。

昭和28年に宮田・滑川地区の住民による「神峰公園整備推進会」の活動の一環として植栽されました。

かみね公園の桜は市民の手づくりの貴重な財産といえるでしょう。



## わがまちの匠たち 日立風流物・高田瑞穂さん（本宮町）

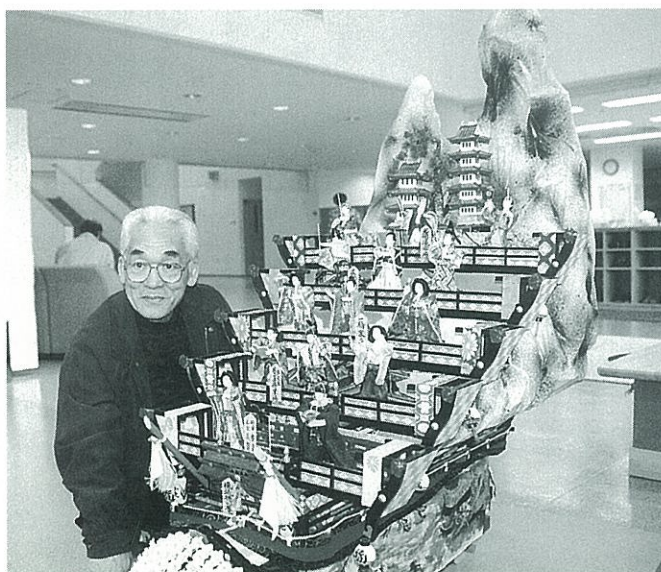
### 確かなものを次世代へ

昭和36年就職のため日立に来て、当時の人形作者長の家に下宿していたのが縁で人形製作に関わり、元来手先が器用なのと、アイデアに富み、排他的だった世界に新風を巻き起こします。

一見物静かですが内に秘めた情熱を作品に注ぎます。11分の1の日立風流物のミニチュアはおよそ1年をかけて製作。全て本物と同じように動きます。ミニチュア製作はお祭りの時に孫に曳かせようと思ったのがきっかけとか。

今後は保存会のあり方も長老の方々の意見を大切にしながら旧態依然ではなく、興味のある者は仲間に迎え人と人との繋がりを大事にまちづくりにつなげたいと語ります。

日立風流物はからくり人形の山車ということで、全国的にみてもめずらしい。こんないいのが日立にあっても残念ながら知名度が低い。もっとPRをしてたくさんの人に見ても



raitai. そんな願いを込めて、現代の世相、要求を考慮したものにとさらに製作に磨きがかかります。書道家であり墨絵も嗜む(見事な画風)そして緻密な計算を基に組み立てられる山車。現在、2基目を考えているとのこと。近い内に高田さんの天賦の才能が形となって披露してもらえそうです。

現在は風流物北町支部の作者長。風流物・ささらの保存会が、どう転換期を迎えるのか、女性も関わる時代がくる、また必要なのではと問いかけ見守りながら、高田さんの心はさらに風流物のからくりの思いを馳せます。

## トピックス

### 自分のことから

～環境部門コミュニティ推進者のつどい～

2月20日らぼーるひたちにて「みんなで協力・身近な環境改善」というテーマで開催されました。

実行委員会より今年度実施した不法投棄ごみの撤去作業についての報告などがあり、ごみ問題に対する認識を深めました。

#### みんなで協力 身近な環境改善



基調講演は「水郷トンボ公園の活動」と題して霞ヶ浦・北浦をよくする市民連絡会議事務局長の飯島博氏が行い、自然環境の再生事業について、まず大きな目標を立て、最初は自分のことから個人として取り組み、その後に目標を目指すシステム作りをする。実施に当たっては常にどうすればできるかというプラス思考で取り組むことが大切と話されました。

## 編集後記

こみこみ3号お待たせしました。コミュニティリーダーのお役に立てる情報紙をと編集員一同足でかせぐ取材を心がけながら、おかげさまでなんとか1年乗り切る事が出来ました。今後もピチピチの情報紙でありつづけたいと願っております。どうぞ地域の情報・知りたい情報・ご意見をお寄せ下さい。